津山ご城下めぐり旅

歴史と文化の城下町

《城西界隈》

津山・歴史の道しるべ

津山は、大和と出雲の交わるところ。多くの逸話を残す、歴史の町。

出雲街道

大和と出雲、現在の東京と大阪にも匹敵する、このふたつの大都市の間にあって、津山盆地は、歴史の道として、古くから栄えた土地でした。そうして出来た出雲街道は、後醍醐天皇から出雲の阿国まで、いろいろな歴史上の人物が、悲喜こもごもの思いを込めて歩いたことでしょう。江戸時代に入って、大きな城下町に生まれ変った津山・出雲路を往く旅人にとって、雄大なお城はぎっと、遠くからでも、旅程の目安となり、旅のなぐさめとなったことでしょう。今も、林田町界隈の街道沿いには、昔ながらの旅籠のたたずまいが残ります。

厳しい自然が育てた、勤勉、繊細な作州人。歴史の舞台に確かな足取りで輩出。

津山の人と心意気

山に囲まれた厳しい自然の故か、美作・津山からは地道に勉学にはげみ修養を積み、強い信念に生きる人々が輩出しています。西洋医学の草分けといわれる宇田川玄随。幕末日本の夜明けに大きな役割りを果たした、洋学の箕作阮甫。武道では古式泳法神伝流を六十余州に広めた植原六郎左衛門。江戸の斉藤弥九郎道場の名師範代、井汲唯一。近年では総理大臣・平沼騏一郎も津山の出身です。そしてだれてならないこと。津山は清らかな水の流れで磨かれた美人の多い町でもあります。色白く、目元の涼しい、しっかりした顔立ちが、作州美人の特長です。旅の途中、きっとあなたも出逢います。

城下町町名考

上り下りの高瀬舟 城下町三十六ケ町、賑わいの日々

津山は、今も昔ながらの町名が、そのまま残されています。新魚町や桶屋町など一定の職業の町人がまとまって暮らした町。美濃町、福渡町など、地名の付く町名は、その地方から移り住んで来た人々の暮らす町。城下町が生まれ町が出来てゆく、当時の賑わいを彷彿とさせますね。さて、船頭町といえば、今津屋橋の上手、河岸の舟着き場を中心に栄えた町。船乗りや船持ちが暮らした町です。河岸には、常に数十隻、多い時で百数十隻の高瀬舟がつながれたといわれます。吉井川の両岸に迫る山々の眺めは、旅人の旅情を誘い、津山を旅する文人墨客は、皆この高瀬舟の船旅を日記に残しています。

神社仏閣ミニ縁起

公孫樹そびえる、あじさい寺 日本三大みこしのひとつも、津山に。

城下町の生みの親、森忠政公は、信仰心の厚い賢君であり、津山は神社仏閣の多い町となりました。まず神社では、城下の総鎮守、宮脇町の徳守神社。三百貫もある大みこしで有名です。それから、巌成の作の門神立像、重文の神額など、見ものも多い、二宮の高野神社。巨木生い茂る一宮の中山神社。天句践をむなしうするなかれ……児島高徳ゆかりの作楽神社。そして、古代、美作国の国府をしのぶ美作総鎮守の総社宮など。お寺では、森家菩提寺の本源寺。薄田泣菫が公孫樹下に立ちて詩ったあじさいの寺、長法寺。赤穂浪士・神崎与五郎の母が眠る愛染寺。作州に名園ありと聞こえる安国寺……とたずねてみたい城下町の神々、仏達は数知れません。

作州民芸館

元銀行で異彩を放つこの建物は大正期の貴重な遺構です。内部では津山市を中心に作られている民芸品、郷土玩具などを展示し、二階には城西地区の歴史を展示して広く城西地区を紹介りしています。入館無料

9:00〜17:00（入館は16:30まで）

㊡月曜日 但し月曜日が祝祭日の時はその翌日

名産とおみやげ

■銘菓
- 十万石・初雪・桐製・いちま
- 蔵どら・きんちゃいな
- 千本桜・衆楽雅藻・三羽鶴・べっぴんさん
- 菊作饅頭・松の露・津山ロールケーキ
- 津山せんべい・津山往来

■特産品
- 竹製品
- 山のいも 自ねんじょ
- 木工品（お盆・衝立・花台・机）
- ハチミツ・津山漬・生姜佃煮
- 備前焼

■民芸品
- 作州牛・奴鈴・衆楽人形
- 鶴山彫・津山奴・土鈴・横野和紙
- 金箔合紙・作州がすり（反物・テーブルセンターのれん）

■地酒
- 加茂五葉・富久迎
- 作州津山地ビール・山いも焼酎

■味覚
- 鶴山おこわ・かもなべ・黒豚しゃぶしゃぶ
- 作州牛肉・観光農園（いも掘・ジンギスカン・そずり鍋他）

■ご当地グルメ
- 津山ホルモンうどん ・そずりなべ

■レンタサイクル
- 津山観光センター……（0868）22-3310
- 津山駅前観光案内所…（0868）22-3732
- 城東観光案内所(和蘭堂)（0868）24-6288
- 市内モデルコース所要時間………半日

■観光タクシー
- 津山駅前観光案内所…（0868）22-3732

■観光ガイド（ボランティアガイド）
- 津山市観光協会……（0868）22-3310

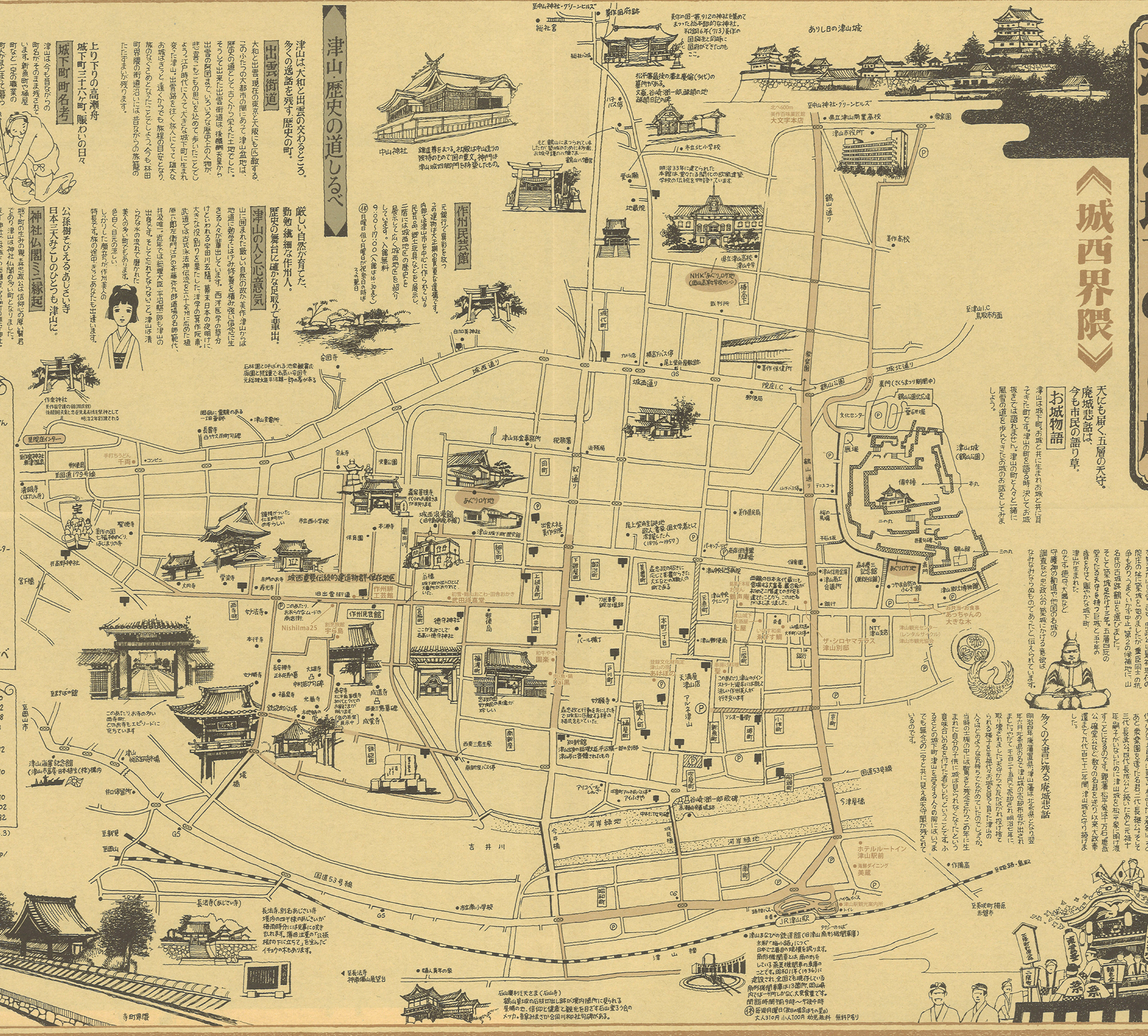
■市内観光のお問い合せは
- 津山市観光協会 （0868）22-3310
- 津山市観光協会北支部 （0868）42-4402
- 津山市観光振興課 （0868）32-2082

（R6.3）

観光案内板

Web版：http://www.meguritabi.ad-sunlight.jp/

インスタグラムはこちらから



お城物語

天にも届く、五層の天守。廃城悲話は、今も市民の語り草。

津山は城下町。お城と共に生まれ、お城と共に育ってきた町です。津山の町を語る時、決してお城抜きでは語れません。津山の町と人々と一緒に風雪の道を歩んできたお城のお話をしてみましょう。

築城のあとさき

室町時代、美作の守護大名・山名氏が築いた鶴山城。応仁の乱の後、廃城となりやがて戦国の世も終わり、江戸時代を迎えます。慶長八年、森忠政公が美作十八万六千五百石に封ぜられ、本格的な築城がはじまります。忠政公は最初、現在の院庄の址に築城を始めましたが、重臣同士の抗争もあり、うまくいかず中止。第2の候補地に、山名氏の古城跡、鶴山を選びました。そして築城足かけ十三年。五層四辰の堂々たる天守を持つ巨城と五十年の歳月をかけて、賑やかな城下町、津山が生まれたのです。徳守、大隅など守護神の勧進や、他国の名城の調査など、忠政公の築城にかける意欲は、なみなみならぬものであったと、伝えられています。

鶴山四百年の城主、森家と松平家。

鶴山の町とお城の生みの親、森忠政公は、織田信長の側小姓として本能寺の変で勇名を遺したあの森蘭丸の弟です。信濃川中島の功で美濃から美作十八万六千五百石に封ぜられました。森家は、そのあと、衆楽園を造った名君二代・長継公。そして三代・長武公、四代長成公と続いたあと元禄十年、嗣子がいないために津山城を松平家に明け渡すことになるのです。親藩・松平家は十万石。慶哉公、確堂公など、数々の名君を送り、以来、大政奉還まで、九代百七十二年間、津山城を守り続けました。

多くの文書に残る、廃城悲話

明治四年、廃藩置県。津山藩は、北条県となり、翌年六月、北条県の名で津山城の売却布告が出されました。やがて、千百二十五円で売却され、明治七年に取り壊されました。天守から大瓦がはがれ、投げ捨てられる様子を先祖代々お城を見て育った津山の人々はどのような気持ちでながめていたのでしょうか。当時の士族の中には、驚きと残念さからこの年に生まれた自分の子供に、城は見られなくなったという意味合いの名を付けた者もいた、ということです。ふるさとの城下町、津山を愛する人々の胸には、いつまでも無念の二字と共に、見えぬ天守閣が残されているのです。